

第二部：奉仕と奉仕者たち：使徒的伝統における奉仕

[53]

教会の生活、そしてキリストによって集められ、新たにされた人類の生活は、礼拝の生活であり、信者は愛の交わり、すなわち父、子、聖霊の祝福された三位一体のいのちにあずかります。私たちは、頭であるキリストと共に、その聖霊の力によって、神の栄光のため、そして神の愛に満ちた目的を知らせるために、様々な方法で神に仕えます。

I. 御言葉の奉仕

[54]

神によって遣わされた使徒（ヘブライ 3:1）として、キリストは御父の御心を実行することを他の人々と分かち合いました。キリストは、ご自身が仕えるために世に遣わされたように（ヨハネ 20:21-23）、彼らを福音に仕えるために世に遣わされました。彼らは使徒という正式な称号を与えられました。彼らの務めは、奉仕の務めでした。彼らはキリストを知らせ、キリストの民を世話するために遣わされたのです。使徒たちは、すでにキリストの公の奉仕に結ばれていましたが、昇天後もキリストの友、しもべであり続け、神がキリストにおいて彼らのためにしてくださったことをすべての人に伝えるという、自分たちに与えられた責任を十分に自覚していました。

[55]

使徒言行録では、使徒たちは「御言葉に仕える者」（使徒言行録 6:4。ルカによる福音書 1:2 参照）と表現されています。この表現は豊かな意味を持ち、聖書の中で語られている、創造における神の御言葉による働き、そして歴史における神の救いの目的についてすべてを語っています。神は語られること、行われること、そして行われることによって、私たちに神を知らせます。言葉と行いの間には一体性があります。神の私たちに対する働きにおける、この言葉と行いの完全な相互依存は、その全存在において神の言葉である御方の到来において頂点に達します。「御言葉に仕える」とは、常に実り豊かな言葉を持ち、行いによって神を知らせる、生ける御方に仕えることを意味します。キリストにおいて、言葉と行いは究極的に一つです。聖霊を通して、これらの行いと言葉は、私たちの中にいるイエスの生ける臨在において頂点に達します。説教と聖餐は、まさにこの文脈において理解されなければなりません。説教においては、神の言葉ご自身が説教者を通して私たちに語りかけます。「あなたがたの言葉を聞く者は、わたしの言葉を聞くのです」（ルカ 10:16）。聖体拝領においては、主の「これはわたしの体である」「これはわたしの血である」という言葉が、その意味と、ご自身を実際に捧げることの両方を伝えています。

[56]

したがって、「御言葉の僕」とは、この神のいのちのすべてをこの世にもたらす者たちであり、私たち皆が、今度は私たち皆が、それぞれに独特で異なっていながらも、完全な調和のうちに一つに集い、仕える者となることを可能にする者たちです。

[57]

キリスト教徒間の現在の不和は、この御言葉の奉仕に関する教義と実践の分裂に決定的に反映されています。したがって、キリストの奉仕の目的について共通の認識に達することは、キリスト教会全体の一致を促進する上で広範な影響を及ぼすでしょう。

II. 聖霊の賜物

[58]

キリスト教共同体全体は、主が来られるまで、福音を広め、主の救いの御業を証しする責任を負っています。この務めは、「父なる神の御旨に従った、御子と聖霊の使命に由来する」（第二バチカン公会議、*Ad gentes*、2）。

[59]

聖霊は、時代を超えて、キリストの名によって洗礼を受けた人々に賜物を注いでこられました。これらの賜物は、教会を建て上げるためのものであり、教会は世の救いのために福音を宣べ伝える務めを負い、すべての人々が信仰に至り、三位一体の神への礼拝にあずかるよう努めています（ローマ 15:7-16、コリント人への手紙二 4:13-15 参照）。このように、与えられたそれぞれの賜物は、奉仕と奉仕において実践されるべき応答を引き起こします。

「そして、その賜物によって、ある者は使徒、ある者は預言者、ある者は福音伝道者、ある者は牧師、また教師となり、聖徒たちを整えて奉仕のわざに携わらせ、キリストのからだを建て上げ、ついには、私たちが皆、信仰の一致と神の子を知る知識の一致に達するまでとなるのです。」（エフェソ 4:11-13）したがって、聖霊の賜物は交わり（コイノニア）のためにあります。つまり、人類を父と子との交わりへと導き、信じる者たちの間に交わりを築き、強めるためにあります。

[60]

聖霊によって授けられる賜物の中には、聖職に召された人々が受ける特別なカリスマがあります。このカリスマは、すべての賜物の行使において貫かれるべき秩序と調和に向けられています。聖職者と非聖職者の奉仕の関係を正しく理解するためには、両者において、賜物を通して教会を活気づけ、一つにする聖霊の働きを見ることが不可欠です。「賜物はいろいろあっても、御霊は同じです。奉仕はいろいろあっても、主は同じです。働きはいろいろあっても、すべての人のうちにそれを働かせる神は同じです。」（コリント人への手紙一 12:4-7）。同じ聖霊が、洗礼を受けたすべての人々の間に、そしてすべての世代にわたって働いています。

[61]

新約聖書は、初期のキリスト教共同体における聖霊に満ちた生活を描いています。按手奉仕の起源は、キリストが使徒たちに与えられた使命にあります（マタイ 28:18-20）。当初は単一の規範はありませんでしたが、按手奉仕は教会への賜物であり、教会の共同生

活と礼拝生活における指導、教会の秩序と構造の維持と深化、宣教的証しの組織化、そして福音を理解し適用する際の識別力のために与えられました。時が経つにつれ、教会は聖霊に導かれ、司教、長老、執事の三重の奉仕を規範として認識するようになりました。新約聖書に見られる他の奉仕の規範も、この三重の奉仕に同化されました。教会の歴史を通して、奉仕のための聖霊の賜物は、すべてが同じように重要視されてきたわけではありませんが、すべてが危機や機会の時に新たに授けられてきました。しかし、新約聖書の証しは、聖職者による奉仕がどのように発展してきたかに光を当て続け、私たちの様々な教会における聖職の働き方に疑問を投げかけ続けなければなりません。

III. 教会、生きた体

[62]

信者の共同体は、聖霊によって存在させられます。聖霊は信者を互いに結びつけ、賜物を分配します。こうして、共同体は生きた構造を得ます。新約聖書における比喻の中には、体、家、民、ぶどう園などがあり、成長の原動力と、多様な側面と次元を持つ現実を示唆しています。また、花嫁、群れといった比喻は、共同体が独自の明確なアイデンティティを持ち、神の関心の中心であり、神の愛を分かち合うよう招かれ、信者が聖霊において神の愛を経験する聖霊に開かれていることを暗示しています。共同体は福音を広める中で、すべての人々を回心と新しい命へと招きます。聖霊に導かれて、共同体は世界の多種多様な文化圏に広がり、年々、世代を超えて支えられています。何世紀にもわたり、福音が人々の想像力を刺激し、聖霊が新しい会員や若い会員の愛をかき立てるにつれて、教会は若返り続けています。すべての枝や小枝に緑をもたらすぶどうの樹液のように、教会は生命のあふれる源です。人間という環境から、教会は新たな豊かさを受け、それを育み、今度はそれを変革し、世界の様々な文化を神の国の兆しへと開きます。聖霊は、愛、喜び、平和、忍耐、親切、善意、誠実、柔和、自制という収穫をキリスト教共同体にもたらすことによって、その歩みを導きます（ガラテヤ 5:22-25）。共同体は生きた有機体であり、個人の集まりではありません。人々が古いものも新しいものも交換する会合の場であり、物を鑑賞する博物館ではありません。記憶という形で伝承によって伝えられたものは、それを受け取る人々の中でパン種の役割を果たし、人々はそれを大切にしながらそれを豊かにし、後継者たちへと伝えていきます。もちろん、キリスト教徒が聖霊の導きに正しく応答しないこともあります。キリストへの忠実さを欠き、神への礼拝に生ぬるさを見出し、互いに愛を示さず、宣教活動に失敗します。ですから、すべての生物と同様に、キリスト教共同体も休眠期と衰退期を経験します。しかし、そのような時でさえ、証しなしには決して立ち去らない神の霊によって教会は支えられているので、力強く健全な生活への希望が保たれます。

1. 信仰共同体と洗礼

[63]

聖霊は、御言葉を聞いた人々が唯一の救い主であり仲介者であるキリストのもとに来るように、人々をこの新しい命へと招きます。洗礼は共同体の中で、受けた信仰を告白する新しいキリスト教徒に授けられます。象徴的に、彼らは清めの水に浸され、聖霊を受け、「父と子と聖霊の御名によって」信仰の衣を着せられます。キリストの死と復活においてキリストと一つとなり、彼らはキリストにあって生まれ変わったことを証します。洗礼の執行において、共同体は伝統的な信条の言葉によって信仰を証します。

例えば、使徒信条は、候補者の信仰告白に由来しています。メソジスト派とカトリック教会は、キリスト教徒は使徒たちから受け継がれ、共同体とその構成員によって従順に説かれた信仰に洗礼を受けるという点で一致しています。どちらの伝統においても、共同体の牧師がキリスト教入信の全過程を司るのが通常の慣習でした。メソジスト派とカトリック教会はともに、信者の乳児に洗礼を施すことを正しいと考えています。両教会は、信者に対し、洗礼において自らが立てた、あるいは自らのために立てられた誓願を新たにすることを促すよう奨励しています。

[65]

洗礼によって、信者の共同体は神の聖性にあずかります。この聖性は、信者のキリスト教生活において表されます。共同体は主の記憶を糧とし、主の変わらぬ臨在を祝い、神と隣人への奉仕が世の終わりまで続くことを希望をもって待ち望み、悪の力に対するキリストの最終的な勝利への信頼を確認します。それ自体が神の国のしるしであり、手段なのです。

[66]

このように、洗礼を受け信じる共同体は、一つの交わりです。洗礼を受けた信仰と、神の賜物であるすべての聖なるものを共に持ち、彼らは神の恵みと力によって聖なるものとされた人々の交わりへと成長していきます。このように、洗礼を受けたすべての人々が「聖徒の交わり」を構成すると同時に、彼らは特定の人々、すなわち聖徒たちにおける神の恵みの顕著な存在を認めます。聖徒たちの生き方と模範は、イエスのために血を流したこと、そしてあらゆる世代における神の霊の変革の働きを証ししています。「雲のような証人」は、宗派の壁を超越します。

2. 礼拝共同体

[67]

キリスト教共同体は、その構成員が共に洗礼を受け、信仰を抱くことによって、繁栄を続けています。

しかし、それはまた、主の記念、すなわち感謝の礼拝によって支えられ、養われます。感謝の礼拝において、聖霊に祈り求める中で、復活したキリストの臨在を体験します。そこでは、聖書と福音の宣教を通して神の言葉が語られます。共同体の聖餐を通して、信者は「全人類のために用意された天上の宴を前もって味わう」（英国メソジスト礼拝書、1975年）のです。信者は、自分たちのために捧げられたキリストの体と血の秘跡を受けることによって、復活した主が聖霊において地上に臨在する体となるのです（コリント人への手

紙一 10:16-17)。罪深い世界に救いと和解をもたらした主の体と血にあずかる彼らは、今日、主の死と復活という過去の出来事を宣べ伝え、そうすることで、「死んで復活した」キリストがまた「来られる」という確信と希望を世界に示すのです。

[68]

礼拝の場における主の臨在を経験することで、信者の心と精神は主の臨在の他のあらゆる側面に調和します。彼らは貧しい人々に仕え、社会正義のために闘う時、主から受けた愛を主に返します。病人や苦しむ人々の中にキリストの苦しみを見ます。福音のために耐え忍ぶ自らの苦痛と悲しみの中に、彼らはキリストの受難を分かち合います。これらすべてにおいて、信者はキリストと聖霊において、すべてがすべての人に共通であるという素晴らしい交流を経験します。そして彼らは、自分たちの持つものすべて、そして自分たちのすべてを、賛美のいけにえとして神に捧げます。

[69]

礼拝の交わりの中で、共同体はイエス・キリストを主と告白し、キリストが与える平和を分かち合い、復活したキリストが父なる神の栄光のためにすべてのものを満たす天の御国を待ち望みます。

このように、信者の共同体は、すべての被造物の名において神に栄光を帰す、宣べ伝え、祝い、仕える共同体です。主日に集まることによって、共同体はその成員の生活を形作り、週ごと、日々の務めを、復活した主の大祭司職のもとに集う信者たちの王なる祭司職の表現とするよう助けます。こうして、共同体はその成員に、神に捧げられ、キリストの最終的な顕現における成就へと導かれた生活様式を与えます。

3. 共同体における聖職者

[70]

使徒の時代以来、聖職者は共同体を導き、神を礼拝し、キリストを宣べ伝え、キリストを受け入れ、共同体の聖霊による奉仕の生活を組織してきました。礼拝、証し、奉仕は、言葉と聖礼典において手を取り合います。これは、キリスト教の聖職者がどうあるべきか、どうあるべきかの中心的な模範となっています。

[71]

人々の中から選ばれ、叙階された聖職者たちは、共同体の祈りを一つにまとめ、神の前に民を代表します。共同体の司牧を託された彼らは、キリストの名と御人格において行動し、人々を祈りに導き、御言葉を告げ知らせ、説明し、信仰の秘跡を執行します。

[72]

それぞれの場所で、司牧者は信者を一つに集め、すべての聖職者が互いに交わり、同じ福音を伝えることによって、すべての信者の間に確信と交わりの普遍性を確保します。彼らは、使徒時代から教えられた福音、主の救いの臨在と働きのしるしと手段としての秘跡、そして聖霊がすべての人に語りかける聖性への呼びかけを、自分たちが受け継いだものを伝えます。

[73]

信者は、礼拝と証しにおいて、また召命の務めを果たす中で、奉仕者を中心に一つに

結ばれ、聖霊によってキリストに集められていることを自覚します。信者は、自分たちに差し伸べられる司牧的配慮の中で、羊のために命を捧げた善き羊飼いに導かれていることを感じます。

[74]

共同体は主日ごとに刷新され、受け継いだ聖伝によって養われます。そして、この責任は、共同体における監督という使徒的務めを受け継ぐ奉仕者に特に委ねられています。監督の務めは、奉仕者にとってすべての教会への配慮を伴います。彼らは、共同体が一つであり続け、聖性において成長し、その普遍性を保ち、使徒的教えとキリストご自身から与えられた福音宣教の使命に忠実であるように努める責任を負っています。

[75]

キリスト教共同体のこれら四つの「特徴」は、その存在のあらゆる瞬間に体现されるべきである。また、それらは世代から世代へと効果的に伝えられるべきである。神の恵みの神秘の充満へと移った聖徒たちは、永遠に共同体の一員である。過去の証しと模範は、今も大切にされ、天国の聖徒たちは、キリストの「最も親しい愛」の実例として、そして神のすべての約束が究極的に成就したことの、今現在の証しとして大切にされている。

[76]

福音の伝達は、司牧者の指導と励ましのもと、信者全体の働きです。主が民の間に生き生きと臨在されることは、キリスト教生活の源です。共同体の司牧者は、主が民に恵みと霊的な力を与え、地上の巡礼の目的地へと導く主のしもべです。

[77]

言葉と秘跡を通して福音を伝えることは、それ自体が聖霊の働きです。叙階された司祭たちは、信者をキリスト教的完成へと促しながら、キリストの呼びかけに従い、様々な時代、年齢、生活状況にふさわしいキリスト教的聖性のあり方を探求する共同体を助けるのです。カトリックとメソジストは、神の力を受けた聖職における聖霊の導きを認める点で一致しており、信仰を教え、確立する責任に関して、叙任の本質と聖職の構造について、より深い共通理解へと向かっています。

IV. 聖職叙任：召命と権能付与

[78]

聖職叙任への召命、聖職叙任、そして聖職への継続について考察します。

1. 召命

[79]

メソジスト派もカトリック教徒も、あらゆる奉仕を可能にする神の力を認めています。主イエスは地上での奉仕の間、その主権的自由においてご自身が 12 人を任命されました。パウロ自身の言葉によれば、復活したキリストから直接使徒となるよう召命を受けたパウロの経験は、聖霊が人々を意のままに奉仕へと召す自由と働きを証明しています。この召命は、いくつかの形で経験されます。従わなければならないという内なる衝動として、そ

の可能性を示すいくつかの外的要因の重なりとして、教会とその民の影響として、そして私たちに対して要求を行使することによって、あるいは、必要性の兆候と、神のもとでその必要を満たす能力として経験されます。どのような形で召命が経験されるにせよ、それは内なる衝動にとどまることなく、教会によって試され、候補者が叙階される前に最終的に確認されます。カトリックとメソジスト教会の文脈におけるこの判断の異なる方法は、何世紀にもわたる独立した成長の中で発展してきた教会であることに対する異なる理解と経験を反映しています。

2. 叙任

[80]

両教会の伝統は、新約聖書に記されているように、祈りを捧げながら按手することにより、奉仕のために聖別するという慣習を今も保っています。祈りは、それぞれの奉仕の形態にふさわしい聖霊の賜物を祈り求めて捧げられます。叙任は教会の集会で行われ、信徒は候補者に賛同を与え、適切な聖書が朗読され、候補者は教会の信仰への忠誠を告白します。按手によって、叙任された者は既存の奉仕者集団に組み入れられます。

[81]

カトリックにおける使徒継承の理解と実践においては、司教は叙階の行為を通して、キリストの大祭司職を、委ねられた使徒的義務を遂行する共同の働き手である他の奉仕者（司教、司祭、助祭）と、程度の差はあれ奉仕的に分かち合います（第二バチカン公会議『司祭叙階』2 参照）。

[82]

メソジスト派の理解と実践においては、司教制下のメソジスト教会を含むメソジスト派教会において、叙階候補者は、その召命の真正さ、霊的適格性、そして奉仕能力について審査された後、協議会によって受け入れられます。その後、司教または協議会の会長による祈りと按手によって叙階され、福音を宣べ伝え、秘跡を執行し、キリストの群れを司牧する任務を与えられます。

3. 奉仕職の継続

[83]

神の民の共同体において、聖霊の導きのもとに、按手を受けた者も神の民全体も、真の奉仕職は人々にキリストを伝え、彼らを啓発し、信仰において築き上げます。それは、何らかの形で、その実りによって示されます。

[84]

すべての奉仕職は、その実践において、引き続き完全に神の恵みに依存しています。召しを与える神は、その召しに奉仕職の賜物を与えてくださいます。ここで問題となるのは、奉仕者自身の賜物の用い方ではありません。奉仕者は、祈り、聖書の学び、そして秘跡への参加を通して、常に神の恵みのうちに生きています。神の御手に使われる道具として、按手を受けた奉仕者は、言葉と教会の秘跡を通して、神の言葉を神の民に伝えま

す。メソジスト派もカトリック派も、説教された言葉と行動された言葉は牧師の聖性を要求しますが、牧師を効果的にするのは牧師のふさわしさではなく、聖霊の変革力であるという原則を堅持しています。

[85]

神の召命は、カトリックとメソジスト両派にとって、安定した永続的なものとみなされています。叙階された者は生涯にわたる奉仕に身を捧げます。したがって、洗礼と堅信が繰り返されないのと同様に、叙階も繰り返されることはありません。どちらの教派も、教会の変わらぬ実践に忠実です。

V. 収束と相違

[86]

前段で明らかにしたように、メソジスト派とカトリック教会は、聖職に関する根本的に重要な視点を共有しており、聖職者の聖職は本質的に牧会的な性質を持つと断言しています。聖職者は、福音を宣べ伝え、人々を信仰へと招き、言葉と聖餐によって群れを養い、そして奉仕の務めを通してキリストを世に知らせるという機能を遂行し、維持するという特別な責任を負っています。聖職者の聖職は、上記 71 項で述べた意味で、代表的な聖職です。

[87]

この視点には、聖職者の聖職に関して未解決の問題がいくつか残っており、更なる検討が必要です。

1. 聖礼典性

[88]

カトリック教徒にとって、叙階は聖礼典です。メソジスト派は、聖礼典という用語を洗礼と聖餐にのみ用いるのが通例です。しかし、メソジスト派もカトリック教徒と同様に、叙階を、神の恵みが言葉と聖礼典の奉仕のために受給者に与えられることを示す有効なしるしと見なしています。

[89]

前進への道は、秘跡の本質について、より深く共に省察することにあるかもしれません。「見えない神の像」(コロサイ 1:15)であるキリストは、神の性質と目的を明らかにし、私たちが神を知り、神に仕えることを可能にする、主要な秘跡であると考えられます。また、私たちのためになされるキリストの働きの中に、私たちの生活を整え、養い、支える賜物を見出すこともできます。これらは伝統的に、カトリック教会によって、より具体的な用法で秘跡として分類されてきました。

[90]

メソジスト派もカトリック教徒も、聖霊を、聖職者と信徒を問わず、すべての奉仕活

動に力を与えるものとみなしています。さらに、メソジスト派もカトリック教徒も、神の民すべてが真の意味でキリストのしるしでなければならず、すべての奉仕活動はキリストと福音の模範とならなければならないという点で、意見が一致しています。したがって、キリストと明確に調和した生活は、すべてのキリスト教徒の召命です。

[91]

第二バチカン公会議において、ローマ・カトリック教会は教会を「救いの秘跡」(Ad gentes 5; Lumen gentium 1 参照)と呼びました。メソジスト派は「秘跡」よりも「しるし」という言葉を好みますが、どちらの場合も意味は本質的に同じです。なぜなら、教会は創立者の使命に従い、受け継いだ救いの福音をすべての国々に宣べ伝えるからです。

2. 監督権

[92]

メソジストとカトリックは、新約聖書における監督権(エписコープ)の現実性を共に認め、監督権を行使する聖職者が教会生活にとって不可欠であることに同意することができる。

この監督の賜物を行使しなければ、混乱、ひいては不一致は避けられない。コイノニアとエписコープは互いに暗黙の関係にある。カトリックの観点では、この相互暗黙の関係は、司教が典礼を主宰する際に頂点に達する。典礼において、福音の説教と聖餐の執行は、キリストの体を構成する人々を一つに結びつける。

[93]

監督権の行使において中心となるのは、真理における一致を維持するという務めである。したがって、教えることは監督権の務めの主要な部分である。カトリックの理解においては、教会は信仰と秘跡における交わりにおける一致によって一つに結ばれている。ペトロの後継者と結ばれた司教団による共通の信仰の教えは、真理における一致を保証する。世代を超えた司教の継承は、使徒たちから受け継がれた信仰における教会の継続的な一致に役立つ。メソジスト派の伝統において、ウェスレーは自身が牧師を務めていた英国国教会における監督権の現実性を受け入れ、信じていた。メソジスト諸教会との関係において、彼は全体に対して監督権を行使し、彼のすべての信奉者は彼と関係を持つ義務があった。彼は説教、新約聖書注釈、会議議事録を通して教会の主要な教えを説き、教義と霊的活動の公認要約を信徒に提供しました。フランシス・アズベリーとトーマス・コークをアメリカの監督に任命したのは、聖霊があらゆる時代の教会との信仰の一致を保つために、その時、その場所に監督の賜物を授けたいと願っておられるという彼の信念に根ざしていました。それは、教会を活気づけ、一致させることを決してやめない聖霊の賜物の、新しく、そして並外れた注ぎの一部でした。

[94]

叙任の秘跡的性質、そして継承と監督の形態をめぐる残存する相違点について検討を続ける中で、私たちは、すでに私たちをここまで導いてくださった聖霊の働きを喜び、私たちが参加しているエキュメニカル運動自体が、キリスト教徒の一致のための聖霊の恵みであることを認識しています。

メソジスト派とカトリック派が、彼らが目指している「信仰、使命、そして秘跡生活における完全な交わり」（『教会に関する声明に向けて』20）への準備が整ったことを宣言する時が来れば、奉仕の相互承認は、教義上の合意に達することによって達成されるだけでなく、時代を超えて聖霊が多様でありながら統一的に働いたことを認める、新たな創造的な和解の行為にも依存するでしょう。それは、神の主権的な言葉への共同の服従行為を伴うでしょう。

3. 叙階を受けられる者

[95]

新約聖書の記録には、既婚者と未婚者の両方が司牧的務めを果たしていたことを示す強力な証拠があります。長年の伝統により、カトリック教会のラテン典礼は、独身制と叙階された司祭職の間に肯定的な一致を見ており、司祭は未婚のままであることを義務付けていますが、この慣行には例外が認められてきました。メソジスト派は他のプロテスタント教会と同様に、既婚者と未婚者の両方を叙階しますが、この点においてメソジスト派とカトリック派を隔てる根本的な教義上の障害はありません。

[96]

メソジスト派が女性を叙階するのは、女性も召命を受けると信じているからです。それは、内なる確信と、賜物と恵みの外的な表れによって証明され、信者の集まりによって確認されます。

[97]

カトリック教徒は、教会の伝統において受け継がれる叙階の秘跡に属する慣習を変える権限を持たないと信じているため、女性を叙階しません。

[98]

叙階された聖職の性質に関する私たちの一般的な考察と、この特定の問題への対処は、相互に啓発的なものとなる必要があります。さらなる考察は、両方の伝統にとって有益となるでしょう。

結論

[99]

カトリック教徒とメソジスト教徒は共に、教会を人類の救済という三位一体の神の永遠の目的の一部として告白します。教会は、肉となった御言葉の生と死と復活において成し遂げられた神の贖いの御業の恵みを、信仰を通して受け、受け、そして受けようとする人々の交わりです。彼らは聖霊において、父なる神の栄光のためにキリストの主権を認めます。このように、御言葉と聖霊によって構成され、支えられている教会は、世に対する父なる神の喜びのしるしであり、また道具でもあります。教会がしるしであるのは、神の恵み深い目的と御業の初穂であるからです。教会が道具であるのは、福音をさらに宣べ伝え、神の国に属する業を行うという務めを担っているからです。教会は、その共同生活を

通して、神の都が成り立つ愛の社会を証しします。

[100]

カトリックとメソジストの定式は、両者が信仰を告白する教会の具体的な位置づけに関して相違している。

ウェスレーや初期のメソジストは、個々のローマ・カトリック教徒の生活の中にキリスト教信仰が存在することを認めていたが、メソジストがローマ・カトリック教会を、その信徒たちの神聖な善のための組織としてより積極的に認めるようになったのはごく最近のことである。

一方、ローマ・カトリック教会は、第2バチカン公会議以降、洗礼とキリストへの信仰によって「カトリック教会との不完全ではあるが確かな交わり」を享受する人々の中にメソジストを確実に含めており、また、「救いの神秘において意味と重要性を失っていない」（『統一体』3）教会共同体の中にメソジズムを位置づけている。

[101]

ローマ・カトリック教会と世界メソジスト評議会の合同委員会は、発足以来四半世紀にわたり、現在のような相互承認の進展に貢献してきました。この委員会は、メソジストとカトリックの立場と伝統、特にそれらが相互に影響し合う点を明確にすることによって、その貢献を果たしてきました。共通の信仰が大きく明らかになり、始まった共同生活の深まりは、今後も確実に続くものと期待できます。今必要なのは、これまでに達成された合意を強固なものにし、依然として合意が得られていない分野における作業を推進することです。教義上の継続的な進歩は、相互承認と三位一体の神のいのちの共有の深まりを促し、それを反映するものとなるはずです。